



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 282 号)

「教育者・新島襄」 -5-

クラーク博士

井上勝也同志社大学名誉教授



さて、皆さんの中で、札幌農学校にやってきたクラーク (W.S. Clark) 博士についてご存知でない方はおられないでありましょう。現在アーモスト・カレッジでクラーク博士のことを知っている学生は殆んどいませんが、我国では現在でも彼の名前を知っている人は極めて多いのであります。それ程彼は創設時の札幌農学校にあって、たった八ヵ月間に大きな教育的感化を残して帰国いたしました。110 年たった現在もその余韻が伝わってくるのは何故でしょうか。

クラーク博士は 1844 年、アーモスト・カレッジに入学し、卒業後はドイツに留学、1852 年、ゲッティンゲン大学で「隕石の化学的成分」という論文で博士号をとり、帰国いたしましたして、アーモスト・カレッジの教授になっております。1867 年、新島がアーモスト・カレッジに入学した時は、アーモストの町にできましたマサチューセッツ農科大学の学長に就任しておりました。しかしアーモスト・カレッジとは歩いて 30 分ぐらいの距離ですから化学の講師としてやってきておりました。新島は一年次にクラーク博士から化学を学んでいるのであります。

私がクラーク博士の教育者としての偉大さを示していると思います出来事は次の点であります。彼は 1876 (明治 9) 年の 7 月末に札幌に着きまして、8 月 14 日、札幌農学校の開校式をやり、17 日から授業を開始しておりますが、早速彼はアメリカから持参しました聖書を学生に配り、聖書の輪読会をやっております。耶蘇教嫌いの黒田清隆開拓使長官もクラーク博士に押し切られた格好で、聖書を倫理の書物として用いるという条件で黙認して

います。

クラーク博士は 16 名の学生に対して、農学校の前身であった札幌学校時代にあった細かい規則を一切廃止し、“Be Gentleman!”「紳士であれ」、これが唯一の規則だといっています。彼は

ゼントルマンというのは定められた規則を厳重に守るものであるが、それは規則に縛られてやるのではなくて、自己の良心に従って行動するのである。(中略) 出処進退すべて正しい自己の判断によるのであるから、この学校にはやかましい規則は不必要だ。(大島正健著『クラーク先生とその弟子たち』 p.93)

といったのであります。クラーク博士は学生を信頼し、学生の人格に直接訴え、学生の主体性を尊重しようとしています。

クラーク博士のもう一つの教育者としての真面目は、1877 (明治 10) 年 1 月、手稲山における地衣類の採集活動であろうと思います。実物教育を重んずる博士は、学生をつれて雪深い山頂に到着し、高い梢についている地衣を取ろうとしましたが、届かない。そこで博士は自ら四つんばいになって、背の高い黒岩四方之進に自分の背中にのれといった。土足で先生の背中にのることをためらっていた黒岩に、靴をぬがないでそのままのよう促した。このエピソードは教育者クラーク博士を言い尽くしていると思います。即ち、学問を志し、真理を探究する者として、教師は学生よりも先輩であるが、両者の間に本質的な相違はない。大自然の偉大な真理の前に謙虚であることが研究者の基本姿勢である。そして教育者たるものは卒先垂範し、学問の厳しさを、真理を発見することの喜びを教えるべきである、といった考え方がうかがえるのであります。クラーク博士もシーリー教授と同じく、教育の目的を学生に考えさせることに求めていました。彼は「学生は明らかに『考える』(to think) という事を教えられている。そして之が教育なるものの真髄である。」(逢坂信吾著『クラーク先生詳伝』 p.79) と 1873 年の州農業会マサチューセッツ農科大学調査委員報告書に明記していますが、彼は真理を探究するためには、まず志を高く掲げることを態度で示した教育者でありました。

クラーク博士は、1877 (明治 10) 年 4 月 16 日、帰国に際して一人一人の学生と握手し、「必ず一葉ノ端書を以て諸君の消息を余に伝えよ、決して忘るる勿れ」と繰り返しつつ、最後に“Boys, be ambitious!”「青年よ、大志を抱け!」と述べました。これは満 50 歳にして極東の地日本へ、そして未だ開拓の鋏が入って年月の浅い蝦夷地に勇往邁進してきた自分のように、高く志をかかげ、「永遠の命の真直の道を進め」(Now, keep on in the straight way of eternal life) (佐藤昌彦他編訳『クラークの手紙—札幌農学校生徒との往復書簡』 p. 265) と激励した言葉でありましょう。ちなみに彼は札幌郊外島松で別れを告げてから、船で長崎へ向い、5 月中旬京都の同志社を訪問、教え子新島を励まして何がしかの寄付をしていることがわかっています。クラーク博士はシーリー教授と共にアモスト・カレッジの教授であり、彼らの教育者としての人格性が当時の学生に多大の感化を与えました。当時学生であった新島もこれらの教師のキリスト教的な人格主義を学びとり、

彼の人間観・教育観の構築を進めていったと考えられます。と申しますのは、後年の教育者新島の教育実践に彼らの感化、影響を多く見ることができるからであります。■